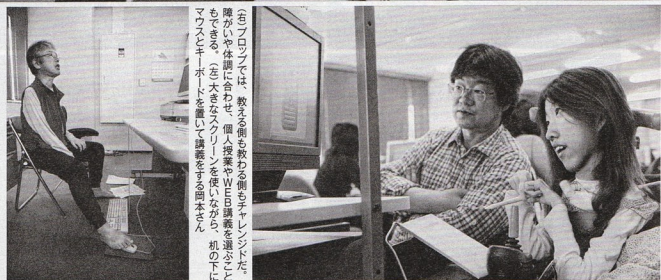


講師の岡本敏己さんは、ポリオの後遺症で両手が動かないので、足を使ってパソコンを操作。竹中さんとはプロップ設立時から付き合ひ、得意料理はカレー



## 「プロップ」のセミナー講師は 全員チャレンジド!

プロップステーションでは、ITスキルを高めて就労のチャンスを得たいと考えているチャレンジドや高齢者を対象に、神戸オフィスと東京オフィスの2カ所でのパソコンセミナーを開催している。パソコンを初めて使う人向けの基礎コースからワード・エクセルやデータベース分野の応用コースまであり、個別学習も可能。また、企業と連携したチャレンジドへの就労支援事業や、自立を望むチャレンジドの相談も受け付けている。



「プロップ」では、教える側も教わる側もチャレンジドでいい人間に合わせ、個人授業やWi-Fiの調子を選ぶこともできる。「(大きな)クリン」を使いながら、机の下にマウスやキーボードを置いて講義をする岡本さん

の見込みはない」

この事実には、彼女以上にショックを受けたのが、竹中さんの父親だった。娘を溺愛していた父は、麻紀さんを奪い取つて「うっ!」と叫んだ。「この子がいては、お前が不幸になる。わしが麻紀を連れて死んだら」目が本気だった。この言葉で、竹中さんは腹をくくった。

「私が辛そうな顔をしていたらダメなんや。父ちゃんの前で、絶対に泣き言は口にせん」

## 介護、子育て、猛勉強、 そしてボランティア

麻紀さんは皮膚の感覚に異常があり、母親が触れるだけで拒否反応を起こして泣き叫んだ。「母と子の絆」なんて神話にすぎなかった。泣き続け、暴れる我が子の世話で、睡眠時間が2〜3時間という日々が何年も続いた。

いちばんの味方であるはずの夫も、育児・介護の手助けはまったくしてくれなかった。

「家事や育児は女の仕事」という……まあ昔の日本の男の人の典型やつたんね」

しかし、竹中さんは諦めない。医学書を読み漁り、いくつもの病院を回り、専門家に質問を繰り返しては「アンタ、しつこいな」と嫌味を買いながらも、障がい者医療や福祉を勉強強化した。同時に、重度障がい者施設でボランティア活動始める。「私、そういうときほどパワーが湧いてくるんよ。もともとワル